

【研究ノート】

荒川清秀先生に聞く
——中国語との出会いから愛知大学へ——

愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員 石田 卓生

はじめに

荒川清秀先生の中国語教育、研究に関する活動については、御著書の『体験的中国語の学び方—わたしと中国語、中国とのかわり』（同学社 2009 年）や『中国語を歩く—辞書と街角の考現学』（東方書店、2009 年）、『中国語を歩く—辞書と街角の考現学（パート 2）』（東方書店、2014 年）、『中国語を歩く—辞書と街角の考現学（パート 3）』（東方書店、2018 年）に詳しいが、今回の聞き取りでは、先生が中国語に取り組み始めた時期から、愛知大学に赴任された頃までを中心にお話をうかがった。

なお、文中の〔 〕は聞き手による。

荒川清秀先生略歴

1949 年 8 月 兵庫県養父郡八鹿町（現・養父市）八木の生まれ
1965 年 4 月 大阪府立茨木高等学校入学
1968 年 3 月 大阪府立茨木高等学校卒業
4 月 大阪市立大学文学部入学
1970 年 4 月 香坂順一氏主催「愚公会」補講助手
1972 年 3 月 大阪市立大学文学部国文・中文学科中国文学専攻卒業
4 月 大阪市立大学大学院文学研究科中国文学専攻修士課程入学
「愚公会」講師
1974 年 3 月 大阪市立大学大学院文学研究

科中国文学専攻修士課程修了

4 月 大阪市立大学大学院文学研究科中国文学専攻博士課程入学

1977 年 3 月 大阪市立大学大学院文学研究科中国文学専攻博士課程単位取得満期退学

4 月 愛知大学教養部講師

1980 年 10 月 愛知大学中国訪問代表団参加

1982 年 3 月 北京語言学院（現・北京語言大学）日本語教員（愛知大学派遣 1983 年 7 月迄）

1993 年 12 月 北京社会科学院研究生院学术交流（北京—上海—香港）

1995 年 9 月 北京日本学研究中心センターへ国際交流基金派遣（日中対照言語論 3 カ月間）

1998 年 大阪市立大学、博士（文学）、愛知大学国際コミュニケーション学部教授

2006 年 5 月 日本中国語学会副会長

2010 年 4 月 中国語教育学会会長、愛知大学地域政策学部教授

2018 年 4 月 中国語教育学会顧問

8 月 第 12 回中華図書特殊貢献賞受賞

I 中国語との出会い

—— 荒川先生はもともと東洋史を専攻されていたと、以前、おうかがいしたことがあります。

荒川：大阪市立大学の文学部は、入った時

は専攻を選びません。1年生の終わりに選ぶんですが、最初、ぼくは東洋史を選択しました。

—— では、もともとは歴史を研究しようとされていたのですか。

荒川：そうです。それは高校時代に決めていました。大学の東洋史には重田徳¹という先生がおられました。早くに亡くなられてしまったのですが、1年生の時、重田先生の授業を受けました。

—— それが面白く、東洋史を選択されたのですね。

荒川：そうですね。おもしろかったし、刺激的だった。とても議論好きな先生でした。先生は明清の社会経済史を研究されていて、ぼくもそういう道に行くかなと思っていたのだけれど、なかなかその道でやっていくのは大変だった。先輩がお金のある人ばかりで、そういう資産家の息子さんみたいな先輩に結構ごちそうになったのだけれど、そういう生活をしてはだめだなと思ったのです。お金がなくてもできることをしないといけない。それで語学をやったということがあります。藤堂明保先生〔元東京大学教授〕もどこかで、そんなことを言っていました。

—— それは先生の世代だと、やはり左翼運動が盛んだったということと関係があるのでしょうか。

荒川：ええ。大阪市立大は盛んでした。

—— 先生も、そういう影響をお受けになっていたのですか。

荒川：家がそんなに金持ちではなかったということがあります。もちろん、そういう勉強はしましたよ。ぼくらの頃というのは、



荒川清秀教授

やっぱり、大学に入ったらマルクス主義です。マルクス、レーニン、例えば『空想から科学へ』とか『共産党宣言』とかね。そういうのが必読書でした。

—— 先生は、以前、昔は中国語を勉強するというだけでも、ある一定の政治的傾向があるように見られるとおっしゃっていました。

荒川：中国語をとったのは、本当に偶然というのか、人がやらないことをやりたいということでした。

—— 中国語をやられたのは政治的な思想信条とかとは別ということでしょうか。

荒川：そんなに政治的ではないし、先鋭的でもなかったです。人がやらないことをやろうと思っていたのです。だから、中国語を選んだ時は中国語を専攻して、今のようになるということまでは全然考えていなかったですね。

—— 先生は、英語はもちろんですが、ドイツ語やフランス語、朝鮮語もやられていますし、もともと語学に興味がおありになったということでしょうか。

荒川：そうですね。言葉には興味があった。

¹ 重田徳（しげた・あつし、1930-1973）大阪市立大学助教授。専門は明清社会経済史。著書に『清代社会経済史研究』（岩波書店、1975年）がある。

東洋史でちょっとやっていけないなということを感じたし、当時、社会科の先生になるのも厳しかった。

—— 周りに台湾からやってきた方とか、中国語ネイティブのような方がいたようなことはなかったのでしょうか。

荒川：ぼくらの時の中国人の先生というのは台湾籍の先生が一人いただけです。

—— 大阪市立大学の教員ですか。

荒川：ええ。その先生は中国語がとてもきれいでした。奥さんは日本人でした。その先生に中国語の発音を習いました。後、白水社の中国語ソノシートというのがあって、それを中川正之さんからお借りして聞いて勉強しました。

—— 中川先生とは幼なじみとうかがったことがあります。

荒川：ぼくはもともと大阪の港区にいたのですが、小一の時に吹田に引っ越しました。同じ時期、そこに引っ越してきたのが中川正之さん〔神戸大学名誉教授、立命館大学特別招聘教授〕で、たしか尾道から来たのだと思います。小学校の頃ですから、いまだに正之兄ちゃんと言ってしまいそうになります。中川さんは「きよひでちゃん」というのが楽そうです。彼がよく言うのは、何かあるとぼくはかれの後ろについていた。それから庭の池で一緒に遊んだとか、そういう記憶はあります。当時の住宅は府営住宅だったので、二戸一で壁が真ん中にあるだけで一緒なんです。隣の声も聞こえるくらいでした。中川さんのところは印刷所をしていたので、ぼくはその校正のアルバイトをさせてもらったりもしました。ぼくは茨木高校というところに行っただけですが、それもやっぱり彼の影響があると思います。大学に進学する時に大阪市立大学と、

滑り止めに学芸大かどこかを受けようと思っていて、市大に合格したのでよそは止めたのですが、彼からは大阪外大を受ければいいのかと言われたことがありました。

—— 学芸大も視野にあったということは、教員志望が強かったのですか。

荒川：教員というのではありません。ただ、教員の道もかなり難しいというのがわかったし、中国語を選んだことには中川さんの影響というのもあったと思う。ぼくらが大学1年の時には、いわゆる大学闘争というのがあって1年の後期の授業がなくなっていました。

—— 大阪市立大学の大学紛争が一番激しかった時期ですね。

荒川：1年の時からそういう風で、ベトナム反戦運動や文革もあった時です。時代的には面白かったのではないかと思います。ぼくは自分のことを左翼とおもったことはないです。シンパではあったけどね。ただ、全共闘とかそういうのはかなり暴力的な面もあったので、そこにはちょっと反感を持っていましたね。共産党の民青〔日本民主青年同盟〕に直接関わったわけではないですが、民青のデモについていったことは1回あります。

—— 私の叔父も大学紛争盛んな頃に大学に行っていましたが、彼は大学生のデモはアルバイトと同じでお金がもらえたから参加したと言っていました。

荒川：いやいや、ぼくは自主的に行きました。ただ、それも1回だけです。あまり政治的に動かなかったです。文革とか、そういうものに対して心情的に共鳴していたけれど、かといって「毛沢東万歳」とか言う気もなかったし、言いたくもなかった。それは自分の心の声じゃないと思っていた。

—— おうかがいしていると、大学紛争が激しい世代にあって、先生はとても冷静でいらしたように見えます。

荒川 冷静というか、おそらく親の影響だったのではないかな。貧乏人の子供は革命に走らない。自分自身も政治的なことに何か夢中になってやるということにはならなかった。

—— 中川先生は、大学院の時の荒川先生は港に行つては中国人の船員と中国語でしゃべっていたとおっしゃっておられました。荒川：そういう募集があったのです。訪船しますよという。それは、おそらく愚公会という講習会にそういう話が来た時のことだと思います。

—— 先生は、昔は、中国語での受け答え方が大体決まっていて、こういう風にしゃべったら、こういう答えが返ってくるというのが想像できたけど、自由化されてくるとだんだんと向こうの人も自由に話すようになってきたと、以前、お書きになっていました。

荒川：そういうことを書きました。大体ね、そういう型通りの会話しかしなかったのです。そういう時は通訳も楽でした。学部の方に話を戻すと、2年生で東洋史を1年やって、その最後の辺りで中国語専攻に変わったわけです。その時は、中国語専攻は1人しかいなかった。本当に1人しかいなかった。文学部は120人だったと思うけど、その中で中国語専攻は1人しかいなかった。それくらい人気がなかったのです。そこに東洋史からぼくと法学部から一人移って3人になりました。法学部の彼はよくできましたが、香坂順一先生〔大東文化大学名誉教授〕と合わず、高校の先生になりました。

Ⅱ中国語研究へ

—— 香坂順一先生が、その当時の主任教授でしょうか。

荒川：そうです。宮田一郎先生〔北陸大学名誉教授、元大阪市立大学教授〕は、もうちょっと後でおみえになった。香坂先生以外にも望月八十吉先生〔大阪市立大学名誉教授〕、本田濟先生〔大阪市立大学名誉教授〕等がいらっしゃいましたが、香坂先生が中心でしたね。

2年生の時は東洋史専攻だったので、『史記』とか歴史書講読の授業がありました。大阪市立大には東洋史の有名な先生がいらっしゃった。今もご健在の佐藤武敏先生〔大阪市立大学名誉教授〕とか、中山八郎先生は清代だったかな、有名でした。中国文学も増田渉先生が有名でした。増田先生は、当時はもうすでに関西大学に移っておられて直接は習うことはできませんでした。ぼくが2年生の終わりに東洋史から中文に専攻を変りたいというと、香坂先生が気持ちよく受け入れてくれました。ちょうど3年生の4月ぐらいから、香坂先生は「愚公会」という中国語学習会を立ち上げました。

中文専攻では、毎年、夏合宿があって、3年生の時は福井でした。山奥の小学校を借りてやりました。その時に魯迅の『阿Q正伝』、後に光生館から注釈本が出ますが、その原稿を持ってきて皆にやらせながら問題点をチェックしていました。その合宿の時に、香坂先生から「一生中国語をやる気はあるか」と言われました。

—— 荒川先生が大学院生の時に香坂先生は北京に行かれていますね。

荒川：そうなんです。修論を書いているときには香坂先生は北京に行っていました。修論のテーマとか全く相談なしです。

—— 修論をお一人で仕上げたのですか。それはすごいです。

荒川：香坂先生は帰ってきた時に褒めてくれましたけどね。修論の原稿は活字にはしていないですね²。

—— 関西におられる間は、中国語を本格的に始めてから愛知大学に赴任されるまでは一貫して「愚公会」にいらしたのですか。

荒川：そうです。その「愚公会」の7年がぼくを育ててくれた。大学の方は補講助手で、発音のしおりみたいなものを作って、それを使って発音指導をしていました。

—— 大学院に上がられてからは「愚公会」の講師をされておられたのですか。

荒川：そうです。その時代は修士課程でも大学で教えることができました。龍谷大学に世話してもらって、そこで3年教えました。だけど、ぼくの中では「愚公会」の存在というのはとても大きいです。

—— 愚公会に中国語を勉強しに来られるのは、どのような方だったのでしょうか。

荒川：若い人もいたし、中高年の方もいましたね。年上の方々にはとてもかわいがってもらいました。その頃、全国的な中国語教育運動みたいなものもあったし、『愚公』という冊子も出していました。

—— 宮田一郎先生は、荒川先生が学部の時に大阪市立大学に赴任されてこられたのですか。

荒川：ええ。

—— 宮田先生は東亜同文書院大学のご出身ですが、授業の中で同文書院のことや後身の愛知大学について何かしらお話があったりしたのでしょうか。

荒川：多少されたと思いますが、あまり記憶はありません。宮田先生についてよく覚えているのは、いつも『漢語拼音詞滙』

(増訂稿)³を持ってきておられたことです。これは、そのことばが共通語かどうかを見る辞書です。

—— 関西地方ですと、追手門学院大学の阿頼耶順宏先生〔追手門学院大学名誉教授〕も東亜同文書院出身です。

荒川：名前は知っていますが、お会いしたことはないです。ただ、坂本一郎先生には習っていますよ。関西大学で上海語の授業をしてらっしゃいました。

—— 坂本先生は神戸外国語大学を退職された後に関西大学へ赴任されています。

荒川：当時、佐藤晴彦さん〔神戸市外国語大学名誉教授〕に誘われて授業を何カ月間か受けに行きました。「もぐり」の学生でしたが、教材までもらいました。神戸外大には、太田辰夫先生〔神戸市外国語大学名誉教授〕や長田夏樹先生〔神戸市外国語大学名誉教授〕がいらっしゃったのですが、そこにも潜り込んで何年か聴講しました。2年ぐらひは聴きに行っていたのではなかったでしょうか。

—— 関西の方では、そのようにあちこち聴講できたのですか。

荒川：けっこう自由な雰囲気でした。太田先生というのは皆に当てないのです。自分で訳して行って、ここは面白いね、と言ってうれしそうに笑う。そんなふうには授業を進めていくんです。そんなふうには自由な雰囲気の中で勉強していました。ただ、あの頃というのは、自分で本格的に研究するという感じではなかった気がします。香坂先

² 荒川清秀「並列格複音節語の意味構造—中国語意味論試論」大阪市立大学大学院修士論文、1974年。

³ 中国文字改革委員会詞滙小組編『漢語拼音詞滙』増訂稿、北京：文字改革出版社、1963年。

生が北京に行かれている間にぼくは使役の問題について論文を書いています、その頃からようやく文法に目覚めてきたという感じですよ。

—— それは、香坂先生の授業を受けて、その後、ほかの学校の授業を受けたら、着眼点が違うとか、方法が違うとか、そういったところで視野が広がったということでしょうか。

荒川：そういう機会を持ったのは日中対照言語研究会に誘われて発表したりするようになってからです。湯谷温泉で開かれた研究会が最初だったかな。

—— 新城の湯谷温泉ですか。

荒川：ええ、そこで合宿をしたのです。大河内康憲先生〔大阪外国語大学名誉教授〕や日本語学の寺村秀夫先生〔大阪大学教授〕がいらした。中川正之さんはもともと知っていたけど、木村英樹さん〔東京大学名誉教授〕とか杉村博文さん〔大阪大学名誉教授〕、古川裕〔大阪大学教授〕さんとはそこで知り合いました。皆、夜通しで文法の話をしていましたが、その当時、ぼくはついていけなかった。

Ⅲ 愛知大学

—— 先生が修士を取られ博士に上がってから愛知大学に赴任されるのは 1977 年です。愛知大学の教員になろうという志望動機というか、理由というか、どのような思いやお考えをお持ちになっていたのですか。先ほどの東亜同文書院出身の宮田一郎先生や坂本一郎先生とのお話からすると、東亜同文書院や愛知大学について明確なイメージのようなものもなかったようですよ。

荒川：愛大が中国研究で有名だということは知っていました。ぼくは実は愛大を一度

応募して落ちているんです。これはいろいろ理由があったようで、その後は採用を見合わせていたのです。

—— 先生が赴任される前に『中日大辞典』が出ています。

荒川：あれは 1968 年でした。ぼくが愛大に応募しようしていた時、ちょうど学会で発表したんです。「命令の間接化」というテーマです。その時に愛大の先生方が皆来られたようです。

—— 鈴木沢郎先生や内山雅夫先生などでしょうか。

荒川：鈴木先生も来ていたと思います。ぼくが愛知大学に来るのに後押ししてくれたのは森博達さん〔京都産業大学教授〕という方で、後に『日本書紀』の音韻の研究で金田一京介博士記念賞を受賞されています。この方は、大阪外大出身で、辻本春彦先生〔大阪外国語大学名誉教授〕の学生です。辻本先生は大阪市立大にも教えてみえられていて、音韻論とか説文の段注〔段玉裁注『説文解字注』〕とかを読んでもらったりしていたので、そこでつながってくるのです。だから、森さんが推してくれたと思います。その学会が終わって一週間ぐらいしたら面接に呼ばれました。やったと思いましたね。

—— 愛知大学名誉教授の今泉潤太郎先生にお話をうかがったら、愛知大学の中国語教員はもともと全員が東亜同文書院卒業生で占められており、それ以外では愛知大学卒業生の今泉先生が初めてでいらした。極力、部外者は入れない「同文村」と言うような雰囲気があって、全くの部外者は陶山信男先生〔愛知大学名誉教授〕が最初だったそうです。荒川先生が赴任された頃にも、そういった雰囲気や、関西にいらっしゃる頃にそうした話やイメージが伝わっていた

ようなことはありましたか。

荒川 ぼく自身は感じたことはありません。

「同文村」に入っていくという意識は全然なかった。愛大に来る前に日中同形語のことを書いていた。用語集みたいなものです⁴。愛大は辞書を作っていましたから、それが評価されたと思います。だから文法の「命令の間接化」というのは面白いと思ってくれたかどうかはわかりません。それは学会誌に載せてもよかったのですが、香坂先生が作っていた『中国語研究』という雑誌に載せました⁵。香坂先生がご自分のお金を出して院生のために発表の場を与えようとしてくれた雑誌です。この論文はけっこう引用されることが多いです。学会の後に外大に呼ばれてもう1回発表することになりました。伊地智善継先生〔大阪外国大学名誉教授〕が、学会で面白かったのがいるからというので、たしか雨堤千枝子さん〔京都産業大学教授中川千枝子〕もいっしょだったと思います。もう一回、外大で発表したわけです。その時は、敵地に乗り込むような気持ちで行ったのですが、悪い雰囲気ではなかったです。伊地智先生や大河内先生とことさら親しくさせていただいたわけではないんですが、それなりに評価してもらったのではないかなと思っています。大河内先生が編集された日本人研究者の研究成果集『日本近、現代漢語研究論文選』（北京語言学院出版社、1993年）にも声をかけてくれました。これに入れてもらったのは「漢語動詞意義中的階段性」です。この論文は、なぜか最近になって中国でよく引用されています。中国の研究者にも読まれて

います。最初から中国語で書けばよかったのですが、これは関西外国語大学教授の靳衛衛氏に訳してもらいました。それ以降は、何回か中国語で発表したり書いたりしています。

—— ある先生が、日本語よりも中国語で書いた方が読者は多いかもしれないから、なるべく中国語で研究成果を発表したいとおっしゃっていました。

荒川：語学はそういう傾向が強くなってきました。日本語で書いて中国語に訳して紹介してくれることは本当にまれなことです。ただ、中国語に関する研究については、日本の読者というのはやっぱり多い。他の分野、特に日本語学の人にも読んでくれることがある。中国語で発表しても、実際にどれだけ読まれているか。ぼくはどちらかというと、日本の読者を念頭に置いています。

IV 愛知大学での中国語教育の取り組み

—— 愛知大学では『中日大辞典』の編纂が行われていましたが、学内での中国語研究や教育の取り組みはどのようなものだったのでしょうか。東亜同文書院以来の伝統というか、愛知大学として、授業のやり方の指示だとか方針だとか、そういうものがあつたのでしょうか。

荒川：指示はなかったです。

—— 教科書はどのようなものを使われていたのですか。

荒川：教科書は指定がありました。

—— 愛知大学の教員が中心になって作った『中文会話教科書』（大安、1964年）ですか。

⁴ 荒川清秀「日中同形語について」『中国語教育』第4号、中国語教育研究会、1975年。

⁵ 荒川清秀「中国語における「命令」の間接化について—“叫(rang)”についての一つの視角」『中国語研究』、1977年。

荒川：それはもう使っていなかったです。中国で出ていた教科書の日本語版でした。それを教員2人で1クラスを教えるという風にやっていました。ぼくは、途中から一人で1クラスを持ちたいと言いました。これには善しあしがあって、1人だけで担当するとその人の色に染まりすぎるとか、教員の負担が重いとかいろいろあるわけです。だから、愛大は1人で1クラスを担当することにあまり積極的ではなかった感じがします。ぼくは1人で1クラスをやらせてもらったほうが一貫性を保てるので、それを80年代からやってきました。

—— 愛知大学の前身校である東亜同文書院の中国語授業は必ず日本人教員と中国人教員がペアになって教えていましたから、2人で1クラスというのが自然と行われたのかもしれない。

荒川：それもあるかもしれないし、一人でやるのは負担が重いみたいなのがあったのではないかな。一人で担当するということは、そのクラスに対して全責任を負うことになるでしょ。2人だったら、どちらかが補うとか、分け合うとかできますから。だから、どちらが良いと簡単にはいえないのです。学生との相性もあるし。

—— 以前は2人で分担していたものを、お一人で担当するとなると相当にお忙しかったのではないですか。

荒川：教養部の場合は10コマ近くをずっと担当していましたが、1クラス2コマ同じだと負担が減る面があります。

—— さて、愛知大学の『中日大辞典』との関わりはどうだったのでしょうか。鈴木沢郎先生、内山雅夫先生といった東亜同文書院出身の教員と愛知大学を出られた今泉潤太郎先生といった方々が辞書の編纂をされ

ていたと思います。

荒川：ぼくが赴任してきた時には内山先生は亡くなられていました。ぼくは内山先生の代わりです。辞書編纂は、日常の細かな作業が中心で、大前提とか辞書論とかそういうのを議論したことはなかったです。いわばルーティンの作業をやっていました。ぼくは文献から用例を書き入れたりとか、書き換えしたりしたのですが、戻されることも多かったです。

—— それは辞書に対する考え方の違いがあるのでしょうか。例えば、先生が編纂された『東方中国語辞典』(東方書店、2004年)は中国語学習のためのツールということが念頭にあって例文が豊富です。

荒川：そうですね。愛大の『中日大辞典』は、「鈴木先生の辞典」ということがあったので、勝手にいじってくれるなみたいなことはあったと思います。それでも、今見てもぼくが入れた用例があちこちにあります。

—— 先生が1年生の学生に推奨していたのは、倉石武四郎先生の『岩波中国語辞典』、90年代に入ると『中日辞典』(小学館)等だったと思います。

荒川：『中日大辞典』は語彙が多かったし、当時としては進んでいました。ただ、1年生が使うにはちょっと荷が重すぎるだろうと思いました。

—— それでも、荒川先生が赴任される前や、ほかの先生は愛知大学の辞書を推薦していたと思います。

荒川：ええ。だけど、学習辞典ではなかった。当時の版はもっと百科辞書的な項目が多かったと思います。そういうものに対してはかなり情熱を注いで作られていた辞典です。初版は、古い白話的なのも多かったと思います。ぼくなんかは語学的なところに興味

がありました。この語を実際にどのように使うのかとか、ニュアンスを重視していたのです。そういう点では、例えば、伊地智善継先生の『白水社中国語辞典』(白水社、2002年)は語の用法(文型)を重視しています。

—— 中国語の辞典では、品詞をどうするのかということもあるのではないのでしょうか。各社の辞典を見ても、版によって品詞を示していなかったり、示したりと、違いがあります。

荒川：ぼくは、品詞を入れましょうか、と言ったことがあります。結局は、そういうのは訳でわかるようにしようということになりました。

—— 先生は愛知大学に赴任されて、しばらくしてから、1982年に北京に留学されていらっしゃいます。当時は中国に行くのが難しかったと思います。

荒川：これは留学ではなく、日本語の教師としての派遣です。これだと待遇が違います。まあ、教えながら半分研修をさせてもらいました。1982年は長期でしたが⁶、その前、1980年にも学校の代表団で行きました⁷。その時は、カメラマン、荷物持ち、通訳を全部兼ねて行きました。通訳は今なら留学生に頼むのですが、ぼくがいる時はぼくがやりますと言って、通訳もやりました。学長などの通訳をすると本当に胃が痛くなります。決まり文句や故事成語がよく使われるもので、しょっちゅうやっていけばいくらでも出てくるのですが、たまにやるとそういう決まった言葉が急には出てこない。通訳は反応がはやくないといけ

ない。でも、通訳は好きなほうでした。愛大に来る学術講演の通訳も何度かしています。

—— 北京からお帰りになってから『用例・用法初級中国語』(光生館、1985年)を出されています。

荒川：そうですね。正式に出版する前に『初

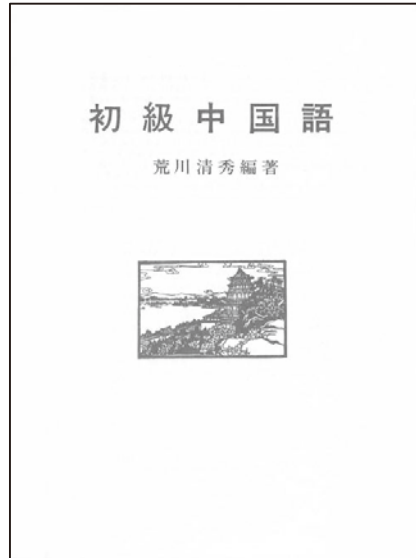


図1 荒川清秀『初級中国語』(私家版、1984年)表紙

級中国語』(私家版、1984年)を作りました。中国から帰ってきたのは1983年の夏だったので、次の学期は指示されていた教科書を使って、次の年に試行本を使ったんじゃないかな。その後、試行本を改訂して出しました。当時は、自分でテキストを出す人が少なかったのでよく売れました。かなりボリュームのあるテキストでしたが、当時の中文専攻生はちゃんと消化していました。今ならとても使えません。

—— 鈴木先生がいらした東亜同文書院は

⁶ 1982年3月から1983年7月まで、交換教員として北京語言学院(現・北京語言文化大学)に愛知大学より派遣された。荒川清秀、荒川由紀子「中国で子供を生み育てて」『国際問題研究所紀要』第81号、愛知大学国際問題研究所、1986年。

⁷ 1980年10月、愛知大学代表団(団長久曾神昇学長等6名)訪中。南開大学、北京語言学院間と「学術・教育交流協定」締結。

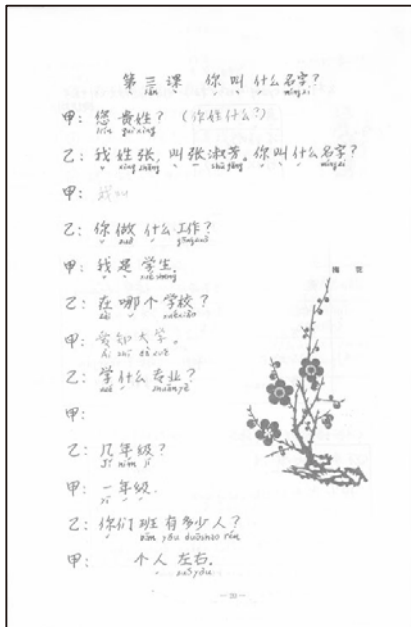


図 2 『初級中国語』第3課本文

上海にありましたが、教えていた中国語は上海では誰も話していない北京官話、北京語でした。そういう北京語絶対主義的なことはあったのでしょうか。

荒川：ありませんでした。教科書に載っている向こうの共通語をやるということで、それほどうるさくなかったですね。ぼくは、後で、これは北京語だ、これは南の言葉だとかかなり言うようになりましたが、それは後々に勉強したことです。鈴木先生はほとんど何も言わなかった。

「普通话」〔中国語の標準語〕をやっているんですけど、その基本は北方語ですね。自分の言葉も基本は北方語です。ただ、今の「普通话」は南方語の影響がなかなか強いです。

——影響というのは、例えば『現代漢語詞典』の改訂を見ると、轻声がなくなっているのがあつたりしますが、そういうものですか。

荒川：轻声とか、「儿化」とか、なくてもいい

いじゃないかなというのはいくつもありますね。昔だと「电影儿」とかありましたが、今は無理やりあんなしんどい発音をしなくてもいいのではないかなと思います。「北京語」愛好者からすると、「儿化」はなくてはならないと思うかもしれないけど、だんだんと消えていくのではないかなと思っています。

だけど、教えるときは一応言いますよ。「ちょっと待ってください」だったら「等一下」というのは南方的な言い方だけ、「普通话」としては、まずはこの言い方を覚えればいい。けれども、北方に行くなら、「等一会儿」とか「等会儿」を知っておかないといけない、と。

ともかく、愛知大学では、東亜同文書院以来の「同文村」に入る意識はなく、自由だったです。ぼく自身、不自由とか、自由とか感じる以前に好きなようにやらせてもらいました。

—— 今日はどうもありがとうございました。

(2018年8月7日、愛知大学豊橋キャンパス荒川清秀教授研究室)